おかげさま

別冊

真宗大谷派
高德寺通信

仏法聴聞

『白骨のお文』

牧野豊丸先生

福井教区
託願寺
住職

牧野豊丸先生『ご法話』

二〇一六年十一月

お手もとの資料をご覧いただきたいと思います。これは〝白骨のお文〟といって、蓮如上人の一番有名なお文ですね。お文というのは250程、カウントの仕方によってはもうちょっと多いという説もありますけども、そのうちの80通を選んでですね、5冊にまとめたのが五帖のお文です。我々が拝読するお文で、そのうちの五帖目の中に入っております。お文というのは、一帖目から四帖目までは、あとに何年何月…どういう時に書いたというように、書いてあるのですが、五帖目22通は、日付が一切書いてないんですね。だから五帖目だけは編集の仕方が違うんだと。数えの順に書いてあるとか、いろんな説がありましたけど、その第16通が白骨のお文という…江戸時代は日本の人口の一割以上が真宗門徒でした。で、それ以上にこのお文の言葉に触れておられる方が沢山おって、日本のまあ、本当に多くの人たちが、口にし、耳にもした言葉の一つだと思います。ですから、真宗門徒以外でも白骨のお文をご存知の方が沢山おられました。今でもそうですね。「朝には紅顔あって夕べには白骨となれる身なり」と、このフレーズは非常に…皆さんがよくご存知の、まあ日本人の一つの共通した…共有認識と言っても良いかもしれません。今日は逐一これを解説するという時間もありませんので、一つの言葉だけ注目をして、お話ししてみたいと思います。この白骨のお文というのは、もともとね、蓮如上人が書かれるお手本というか、元があるんです。その元は存覚(※)という方が書いた文章です。〔※存覚〜鎌倉時代後期から南北朝時代にかけての真宗の僧侶。〕覚如さんの息子さん。で、その方も又、手本という以下敷きにした文章があるんですね。これの半分程です。後鳥羽上皇が書いた「無常講式」というものです。後鳥羽上皇という人は、親鸞聖人がご流罪になって越後へ流されますね。あの時の承元の法難の命令を下した最高責任者です。流罪を命じたご本人ですね。そのご本人がやがて、20年程経ってですね、承久の乱という関東と京都の朝廷と武士との政権争いの戦に敗れて、流罪を命じた後鳥羽上皇が流罪にされるんですね。世の無常というものをひしひしと感ずる。隠岐島に流されて、そこで亡くなっていく。そういう

ときにですね、人生というものを問うて書いたものが「無常講式」…世は無常であると。仏教の輪郭を表わした言葉に三法印・四法印という言葉があります。その一つが〝諸行無常〟というんです。もう一つは〝諸法無我〟、三つ目がね、〝涅槃寂静〟。四法印だと、これに〝一切皆苦〟というのが入ってきます。仏教が説く内容というのはこれですよ。その内の一つが〝諸行無常〟…あらゆる存在は皆、移り変わっていく。一つとしてとどまることはないんだと。〝諸法無我〟っていうのはね、あらゆるものは条件によって成り立つということ。我々がよく言う〝ご縁次第〟ってこと。ご縁というのは条件につながる。条件に合えば私たちは何をするか分からん！　親鸞聖人って方はそれをもっと深く、ご自身を問う言葉としてね、「私は、さるべき業縁のもよおせば、いかなるふるまいもすべき身だと」。これは歎異抄という書に出て来ます。さるべき…どうしてもそうなってしまうような業縁…。業というのは、自分の行為。縁というのは条件です。人間というのは自分が間違い無いから自分は正しいんだと言えるかっていうと、そんなことはない。人を殺さないのは、殺さないという業縁があるだけであって、人を殺すのは、殺すという業縁に出遭っていくという、そういう存在として、自分はあるんだという自覚ですよ。それが〝諸法無我〟…ということの中でね、無常というのは何かといったら、変わっていくもんだという…これは道理ですね。仏教そのものの、一番、第一定義と言ってもイイかもしれませんね。その〝諸行無常〟ということを身に感じたのが、後鳥羽上皇だったと。それがね、この前半の言葉で「夫、人間の浮生なる相をつらつら観ずるに、おぼよそはかなきものはこの世の始中終、まぼろしのごとくなる一期なり」…人間のはかないというそのあり様をこういう言葉で綴っていくんですね。これは中世の言葉ではありますけれども、現代の我々が聞いても胸に突き刺さりますね。「さればいまだ万歳の人身をうけたりといふ事をきかず、一生すぎやすし。いまにいたりて、たれか百年の形躰をたもつべきや、我やさき、人やさき、けふともしらず、あすともしらず、おくれさきだつ人は…」という文章がずうーっと連なって…これは後鳥羽院が言うたことにうなづいた存覚、そして蓮如という方々が、これを伝えていったんですね。でもこの中でね、蓮如上人が言いたいことはどこにあるかといったら、もちろん、これは前半は無常観を言うておるんですが、無常観というのは、普通はね、もののあわれとか言いますけどね、深い深い情感とか感傷にふけったような言葉を無常と言いますね。中世の文学はたいてい無常ということがベースになっておる。それは西行の歌であったって、ああ悲しいなァとかね。そういう詠嘆

をあらわすのを無常という言葉で日本の文学は伝えていきます。蓮如上人はそういうことを超えていくことを言うとるんですね。だから「されば」「されば」「されば」と3回くらい〝されば〟という言葉で、それをあらためていきますけれども…「さればいまだ萬歳の人身をうけたりといふ事をきかず、一生すぎやすし。いまにいたりてたれか百年の形躰をたもつべきや。我やさき、人やさき、けふともしらず、あすともしらず、をくれさきだつ人は、もとのしづく、すゑの露よりもしげしといえり」…まぁ訳さんでもだいたいイメージはお分かりでしょ？この中でね、一つだけ注目しなければいけない言葉はね、〝我やさき人やさき〟と、こう言うとるんですがね、聞いとる皆さんは、そう思っとらんでしょ？　人やさき、人やさきと聞いとるでしょ？（笑）オレのことだと思っとらん！可哀想やなァ、あいつ亡くなったかァ…寂しいなァ～って他人のことだと思っとる。だからこれは文学作品としては、あー無常観やなァって、他人事で読んどったら氣楽なことですけども、そういうことを言うとるんじゃないんです。我、や、さき…人やさき…なんです。私もどうなるか分からんと言っとる！次に「されば朝には紅顔ありて、夕べには白骨となれる〝身〟なり」…ようやく〝身〟という言葉が出て来ましたね。身というのは誰の身かと言ったら…白骨になっていく人を言うておるんだろうと我々は普通聞くんですがね、この白骨のお文って、だいたいはですね、お葬式の後、「還骨」というときに拝読されるというのが、一応決まりなんですが、まァ人によってはね、お通夜で読まれる場合もあります。作法から言ったら「白骨」になってからだということですが、いずれにしても葬儀の中でこのお文が読まれるということが大事なことだと私は思います。で〝身〟というのはね…誰のことやろ？ここでね、誰のことやと問うた時に、この言葉がね、自分を問いかける大事な教えになってくるんです。ただ無常観が書いてあって、ああ悲しいなァ、人は死んでいくんだもんなァ…そういう文章だけだったら、それは教えということにはならないですね。「されば朝には紅顔ありて、夕べには白骨となれる身なり。すでに無常の風きたりぬれば、すなわちふたつのまなこたちまちにとぢ、ひとつの息ながくたえぬれば、紅顔むなしく變じて、桃李のよそほひをうしなひぬるときは、六親眷屬あつまりて、なげきかなしめども、更にその甲斐あるべからず。さてしもあるべき事ならねばとて、野外におくりて夜半のけぶりとなしはてぬれば、ただ白骨のみぞのこれり。」…だいたいですね、この流れはお葬式の流れでしょ？ああ元氣だった人が命を落として、亡くなって…それで親戚集ってね、わいわい言いながら、悲しいなァと言いながら、「さてしもあるべきことならねばとて」って、何を言うとるかっていうとね、このままにはしておけんなァと皆が言ったっ

亡くなった方が火葬されて"お骨"に"還った"状態

て言うんです。このままにしてはおけんからと言うて皆で協力して葬式をしましたと。野外に送って夜半の煙となしはてぬればって…昔の葬式は、ごくごく近代の入り口まではね、お葬式で火葬するっていうのは村がやっておったんですね。で、夜にやっておったと。夜半の煙っていうのは、そういうことですね。要は火葬したっていうことです。そうしたら、その後には白骨だけが残ったと。これは葬式の情景を… 今は、その情景すら失われておるということですけども、この情景の後にね、こういう言葉があるでしょう。「あわれというもなかなかおろかなり」…普通、このおろかっていう字→"愚か"を想像しますでしょ？音だけ聞くと、おろかなことやという風に聞こえるんですね。古語辞典を引くと、おろかという字はこれ→"愚"を使うのも出て来ますけど、第一に出て来るのはこういう字です→"疎(おろそ)か"。意味は何かと言ったら、不十分だとか、おろそかだということ。だから何が言いたいかというと、あわれと悲しんでおるのはおろかなことだって、そういうことを言うとる訳ではないんです。むしろいくらあわれと悲しくてお葬式を盛大にやろうと、簡素にやろうと、家族葬でやろうと、社葬でやろうと、ただそれだけであったならば、それは不十分だっていう、何か大切なことがそこにはハッキリしていないということが残りますよっていうことです。何が不十分かということが蓮如上人の言いたいことです。だから白骨のお文の最後の「されば」から後が、蓮如上人のご教化の中心ですね。何を言うとるかって言ったら…こっから皆さん、しっかり読んでいただきたいんですがね。「されば人間のはかなきことは、老少不定のさかいなれば」…老少不定のさかい。さかいっていうのは…先生によってはね、これは関西の人だから、何とかやさかいっていうさかいと一緒やと。関西弁のさかいだって、そういう風におっしゃる方もおりますけども、～だから…という意味ですね。どういうことを言っているかというと、人間というのは、はかない。今日死ぬか明日死ぬか分からん。そのはかなさを示しているのが、この亡くなった人のお葬式をしておるということであると。それは他人事(ひとごと)ではない、あなた自身のことやぞ！ということを受け取りなさいと、このお文は言うとる。老少不定というのは何かというとね、老というのは年を取った人、少というのは少年。年取ったもの、若いもの。不定というのはね、順番なんか決まってません！っていうことです。皆さんも、この中で、「わしはまだ若い方や、まだ先やな…」なんて思っとっても、そんなことは決まってませんよ…。今日生まれた赤ちゃんも、百歳のお年寄りも同じですよと。皆さんねエ、諸行無常とはどういうことかというとね、私たちは生死(しょうじ)といういのちを生きとるんです。生死といういのちを生きとるってことはね、生というのは"生まれる"という意味ですね。漢字で生(せい)という字を「しょう」と読む場合と「せい」と読む読み方があり

ますね。仏教であえて「しょうじ」と読んでいるのは、生まれてきたということと、死んでいくということです。ちょっと皆さんにお尋ねしますけど、明日の朝、さっと目が覚めると約束できる人、手を挙げてください。頭では覚めるつもりでしょ？　私の手帳には3年先まで予定が入ってますからね。(笑)明日死ぬってことは頭の中では思ってないけど…私、これから福井まで帰らならん。その途中でね、ホームからひょっと足を踏み外すとかね車に跳ねられるとかね…。どんな業縁が待っとるか分からん。業ですから私は帰るという行為の中で、どんな縁に遭うか分からん。皆さまもお氣をつけくださいね。(笑)他人事ではないですよ、これは。お互いがそうです。だから、今日死ぬということを誰も否定できない今を生きとるっちゅうことです。明日起きられるなんてことは言えない今を生きておるんです。人間がはかなきことだっていうことは、私の事実を言うとるでしょ。私はお通夜をね、年間10回くらい、仕事上行くんです。ここにもお寺の方が沢山おられるから、お通夜に行かれると思うんですよ。皆さんも、もし機会があれば聞いてみてください。その前にこっちがお棺の中に入っとるかもしれんけどね。(笑)老少不定だから…。だけど、私はいつも聞くんです。お焼香するでしょ？　箱の中の方がね、「次はあんたの番だよ。」(笑)…みんなそう言っとるでしょ？　亡くなった方は、あんた、覚悟はイイかって言っとるんです。あんた今死んで、生まれてきて良かったっ言えるかい？　亡くなった方はそういうことを私たちに教えてくれる。浄土真宗でね、亡くなった方を諸仏と言うでしょ？　諸仏って仏さまでしょ。死んだから仏さまじゃないです。私にそういう事実を教えてくれるということにおいて、仏という意味が成り立っている。で、亡くなった方は必ずね、法名を名告るでしょ？　法名ってね、死んでから名告るもんではないですよ。生きておられるうちに仏法に出遇うているから、死んでから迷うていく必要がないという世界をそこに見い出しておられる方が諸仏です。お通夜の前にね…よく福井では、お葬式の前に、ご法名を名告ってなかった人にあわてて、お棺の前でね、"おかみそり"の真似して法名をつける…そういうことをやりますけど、本当はね、もしそういう方がいたら、いつやるかって言ったら、これは枕経の時なんです。で、枕経の時にね、これは一つの儀式ですけど、その人はまだ亡くなってないという態で、おかみそりをする。で、生きておるときにおかみそりしたから、法名をおつけして、法名を名告った方の浄土真宗のお葬式をするんです。法名は死んでからつける名前じゃないんです。まして、死んだ人の名前ではないんです。生き方の成就した人が名告っておられるんだという、それが、ご法名です。亡くなられた方は、私に、あんた死ぬよっちゅうことを教えてくれる仏さまです。だから浄土真宗のお葬式は怖いもんでも恐しいもんでも、縁起の悪いもんでもない、大切な方と、有り難うちゅうて、お別れするだけです。尊敬

をしながら、お別れしていくもんです。だからこの〝白骨のお文〟をお葬式で拝読するっちゅうことはね、他人事でないぞ、諸行無常はあんたの事実やで。…ということを聞く、ご教化の場を葬式って言うんです。誰のためにやるのかっていったら、遺された私たちが、亡き方から最後の大事な教えを聞くためにしとる。してもせんでもイイことではないです。誰のためにせなあかんのか？この私のためにせなあかんことやと。家族葬でもイイです。社葬でもイイです。それがハッキリするかどうかは、その一点が葬儀ということの大事な意味や。それは私自身が仏法に出遇うということの意味がそこにあるかどうかということが大事なことや。それは何かと言ったら、人間ということを問う大事な機会です。ご縁です。私が人間であるということがそこで問われておるんだ。問われておるという事実を私がいただくかどうかが、葬儀が成り立つかどうか、あるいは、法事もそうです。報恩講もそうです。それみんな、亡くなった人のためにあげているお経なんてないんです。真宗には。教えを私が聞くためにそこで法要を勤めて、私がそこで亡き方から問われておったなァと氣づかせていただくために、ご縁はあるんです。それを蓮如上人はおしゃってるんです。だから、「たれの人もはやく後生の一大事を心にかけて阿弥陀仏をふかくたのみまいらせて、念仏まうすべきものなり」…ここに集まった人、誰もが自分自身のそのいのちの…本当にですね、意味と意義をそこに問わせていただくという…それを、後生の一大事っちゅう。金儲けることよりも、人の上に立って命令することよりも、旨いもん食うことよりも、何とも比べることが出来ない大事なものの一つ、もっと言えば、人間に生まれて来たということを確かめる大事な一点。それを〝後生の一大事〟っちゅうんです。その後生の一大事を心にかけて阿弥陀仏をふかくたのみなさい…。〝ふかく〟ということはね、全てをお任せするっちゅうことなんです。阿弥陀仏の願いに、このいのちはあったと氣づかせていただいて、その氣づかせていただいたいのちを私が責任者となって、生きていくものになっていくということが、〝ふかくたのむ〟っちゅうことです。浅くたのむってのはどういうことかと言うとね、「阿弥陀さま、あれ、お願いします。これもお願いします。」…ふかくたのむっちゅうのはね、阿弥陀さまに全てお任せするんだから、人生の幸、不幸をすべて私自身がいただいていきます、というて生きて行くものになっていくっちゅうこと。不幸を避けて幸福を求める、そんな必要はありません。全てが私の事実として阿弥陀さまをたのんで行くんだと。そういう生き方の決定、これがね、浄土真宗の教えを生きるものということなんだ。そのご縁をお葬式というところでは、非常に悲しい、厳しい、その事実の前で、私たちは確かめさせていただかなければならない。それが念仏申せっちゅうことです。だからお葬式ということを、私たちは、亡くなってからの三日間、四日間として考えますけれどもね、本当はねェ、私はお葬式というのはね、四十九日の忌明けまでを

お葬式と言うべきだと思います。なぜならね…まあ最近は四十九日どころか、初七日もせんで、お葬式終わったら、それこそお骨をパッパッパッとして終わるという…そういう感じだからね。大事なことを確認しなきゃいけないのは、亡くなった人のお骨の処理のためにお葬式をやってるんではない!! 遺された私が亡くなった方から、そのいのちの意味を問われている時間をもつというのが、お葬式を勤めるっちゅうことです。で、七日七日勤めるでしょ? あれ…何で七日七日勤めるかというとね、人間の精神的なひとつのサイクルが七日なんですって。洋の東西を超えて、七日間というのが一つの区切り。一週間とかね。だいたい皆さん、七日ぐらい経つとね、例えば初七日、亡くなって七日経つと、ようやくね、しい〜んとして、あらためて悲しみが、寂しさがその人を襲うっちゅうこと、あるでしょ? 二七日…まだあの人が隣の部屋で咳払いした声を聞いた…。三七日。玄関をガラガラっと開けてくる音が聞こえたような気がする。記憶があらたまり、深まり、悲しみが高まっていくということを繰り返していくのが私たちの精神状態が平静に戻っていくための時間なんですよ。だから、その度にね、ひとりぼっちにさせないで皆で寄って、正信偈のお勤めをして、亡くなった人のことを朗らかに語り合って、お坊さんが来て、そこで何が大事かということを皆で話し合う時間を、七回繰り返していくと、ようやくね、平静な状態を取り戻せる。それが忌明けってこと。ようやく亡くなった人の悲しみをいただいて生きて行こうと立ち上がっていける。そこまでをお葬式というんだ。そういう意味ではね、近年は直葬をアメリカから輸入した日本が、そのあとに追いかけてやって来た、もう一つの運動が、今、日本でも注目されて行われてますが…グリーフケア運動っていうのがありますけどね。あれはね、直葬した人の、あとに何もケアされないと、ひとりだけ、亡くなった人をかかえた遺族がね、ポツーンとして、その寂しさにまいってしまうと…。だから皆でケアしましょうということが、どうもキリスト教の世界でも、あるようだということからはじまったようですけども。よく考えたら私らはね、それ以前からやとるんですよ。七日、七日というお勤めを。七日七日で亡くなった人を思い出しながら、語り合いながら、それを過ごすことによって人間は、それを乗り越えて来たという、そういう必然性があるんです。仏教の由来では、それは、十王経(人の死後、10人の王によって生前の罪が裁かれることを記した経典。中国の民間信仰と仏教信仰との混合説を示す偽教と思われる)の中で出てくる一つの考え方であって、裁判を受けるんだとかなんとか、いろいろ言いますけどねェ、浄土真宗では、そんなことは関係ないです。浄土真宗は亡くなったらすぐお浄土へ、阿弥陀仏のもとへ参るということが、今ここで頂けたものが法名を名告って、いのち終わっていく訳ですから。浄土真宗のお葬式というのは、非常に簡単なんで

すよ、もともと。もともとは家族葬みたいなもんです。お花だってきんきら金の高価なものを飾るなんて、近年のお葬式の産業的な部分でそうなってきただけです。お棺と棺だけでね。野卓っちゅうので、何やるかっちゅうたら、正信偈、念仏と和讃を勤めて、ハイさようならです。で、その時にね、浄土真宗の教えを聞いたもの同士がお葬式すると、どういうことになるかというと…昔の仲のイイご夫婦はねェ、どちらかが亡くなられるとねェ、「わしゃ、ちょっとお浄土へ還るでな？…」っちゅうて…。浄土であんたんとこ半分席あけて待ってるからねェ…というとね、送る方はね、「はいはい、ちょっとだけ先で待っててくださいね、私もそこへ行きますからね。それまでのお別れですね。さようなら…。」それだけです。そこにはね、亡くなった人と私はどういう関係だったのか。すでにお浄土へ還った人と、これからお浄土に参らせてもらうということをいただいておる人だけが、うなづける世界です。いのちを超えて、いのちに出遇っていく世界です。それが浄土真宗ということです。だから死んで、どっかで迷って、化けて出るんではないかって、そんなことを言う必要はさらさらない!! 堂々と生きて行ける道がそこにあり、堂々と死んで行く世界がそこにあるんだよ。それを生きている間にともに確認していくのが我々が教えを聞くっちゅうことです。どこで死のうとね、それは縁次第。諸法無我ですからね。それこそ今日死ぬか、10年後も生きとるか、それは分かりませんけどもね。でも今、生きているということの大切さにうなづけたものは、いのち終わっていく世界の…あ～そうやったなァ～と死んで行けるんですよという生死を買いた生き方の教えび浄土真宗っちゅうことです。あの私、最近年とりましてねェ…皆さん、何を言っとるんやこの若造が！と思っておられるかもしれませんが…順調に物忘れをする。最近こういうことが多いです。二階に私の部屋がありましてね、二階の部屋までトントントンと上がって、上がったとたんにね、あれ？俺は何を取りに来たんやろ？って、忘れちゃってね…。取りに来たこと忘れてスゴスゴと階段下りていく。下まで下りたら…あっ！あんだったっちゅうて、また上がっていかんならん。滑稽じゃないですか。人間に生まれて来たっていうのもそういうもんだと思います。生まれて来る前はねェ、天上界を捨てて、人間に生まれたいという願いが、そこにあって人間に生まれて来たんだけど、生まれて来たらねェ損だ得だ、好きだ嫌いだということが、自分のところで全てなっちゃった。人間に生まれて来たという意味を忘れちゃってね、余分なもんばっかり手についちゃった。金がなきゃあ～、地位がなきゃあ～、財産がなきゃあ～、旨いもんがなきゃあ～。そんなもんばっかり抱えていのちの方が先に終わっちゃうとね、大事なものを持たずに外に出て行くみたいなもんです。それを流転生死って言うんです。そういう人生はどうなるかって言ったら、又、もう一ぺん大事なものを取りに人間に生まれなおさなあかん。死んで又、生まれて、

死んで生まれて…。これを流転という。人間にこの度生まれて来た私たちはいったい何を一番大事にしなきゃいけないのか？それは私が人間に生まれて来たということの意味に出遇うことやと。その意味に出遇った人が…仏になるんです。だから浄土真宗というのは何かと言ったら、〝本願を信じ念仏申せば仏になる人生を賜る〟ことや。これは親鸞聖人がおっしゃったと唯円さんが言ってます。親鸞聖人は浄土真宗というのは、念仏往生と言うんだ…これは親鸞聖人が一念多念文意というところでおっしゃった…浄土真宗というのは、念仏往生と私は習っておるんですよ。というお言葉があります。念仏申すということは、そういう人生をいただいていくことなんだと。生きて死んでいくという中に、大事なことに出遇って、人間に生まれて良かったなァ～ということに共々に頷き合うて、いのちがそれぞれですねェ、生まれ、死んで行ける、そういう、我が身をいただいていくことですよ。そういう世界を私たちが聞いていくことが、何よりも大事なことだと、頷く人たちが、私たちの浄土真宗のご門徒ということです。そのご縁をいただいてね、私たちが今、朝なタなにそれを確認させていただくのが、一日のたしなみは、朝つとめかわさじと。一月のたしなみは、近きところ聖人のましますところへ参る。一年のたしなみは、それを報恩講という仏事を通して、ご本山へ参ってそういうことを確認させていただきながら、この限られたいのちを、より大切な尊いいのちとして、共々に生きていける世界がまことの世界だといただいていく教えの、お仲間が浄土真宗、真宗大谷派という宗門ですよ。その大事な大事なね、お念仏の相続のお手伝いを、おとり次ぎを自分自身がいただいて、皆さんと朋にそれを生きていきましょう、聞いていきましょうというお役をご本尊の前で宣誓して仏弟子になったという、帰敬式を受けられたのが、今日の皆さんの推進員というお姿です。大切なね…人間にとって何よりも大事なお仕事です。お金を貰うお仕事は早々に引退はありますけど、お金を出しても買えないお仕事を私どもは、いただいておる。これが推進員だということをですね、共々に胞に刻んでいただきたいです。で、我々住職はね、育成員というんですね。推進員と育成員が朋にそのことを歩んでいく…これが同朋会運動ということです。是非、そのことを大事にしてください。これからもお寺に、あるいは宗門にご縁を持つことを続けていただくことをお願い申し上げまして、私のお話しは、これで終わらせていただきます。どうも有り難うございました。

二〇一六年十一月十五・十六日

『推進員のつどい』の一コマ

白骨のお文

夫人間の浮生なる相をつらく觀ずるに・おほよそ、はかなきものはこの世の始中終、まぼろしのごとくなる一期なり・されば いまだ萬歳の人身をうけたりといふ事をきかず・一生すぎやすし いまにいたりてたれか百年の形躰をたもつべきや・我やさき、人やさき・けふともしらず あすともしらず・おくれさきだつ人は・もとのしづくすゑの露よりもしげしといへり・されば朝には紅顔ありて・夕べには白骨となれる身なり・すでに無常の風きたりぬれば・すなはち ふたつのまなこたちまちにとぢ・ひとつのいきながくたえぬれば・紅顔むなしく變じて・桃李のよそほひをうしなひぬるときは・六親眷屬あつまりてなげきかなしめども・更にその甲斐あるべからず・さてしもあるべき事ならねばとて・野外におくりて夜半のけぶりとなしはてぬれば、ただ白骨のみぞのこれり・あはれといふも中々をろかなり・されば人間のはかなき事は・老少不定のさかひなれば・たれの人もはやく後生の一大事を心にかけて・阿彌陀佛をふかくたのみまいらせて 念佛まうすべきものなり あなかしこ

お文…本願寺第八代・蓮如上人（1415～1499）のご製作で門徒への手紙を集めたもの。その中の一つ。

発行日 2017.7.13

《表紙の絵》『蓮如上人』（棟方志功作の模写…）

発行　真宗大谷派 高德寺

編集　住職　新井 義雄（法名 釋義祐）

高德寺　〒164-0002　東京都中野区上高田 1-2-9

☎ 03-3368-6947　FAX 03-3362-8019

今回の別冊も鮮明堂印刷㈱ 藤井清三様のご厚意で発行することが出来ました。この場をかりて、御礼申し上げます。